西洋の数学が入ってきた

ヨーロッパの数学は享保年間（1700年過ぎ）に中国の数学書を通して日本に入ってきました。直接には安政２年（1855）に創設された海軍伝習所でオランダ人から航海術とともに学びました。文久３年（1863）には、幕府の開成所でも西洋の数学の講義が行われました。また柳河春三は安政４年（1857）に「洋算用法」を著し、西洋の数学を紹介しました。

明治５年（1872）、全国に小学校ができると、小学校の算術では和算を廃止して、西洋の数学を採用するという学令が出されました。

そろばん製造の技術が発達し、精巧なそろばんがたくさん作られるようになった

寛政の頃（1789～1800）雲州（島根県）の村上吉五郎（方常）はそろばんの製造法を考えて精巧なそろばんを作り、次第にこの地方でそろばん製造が盛んになっていきました。明治になって、珠の作製が足踏みロクロから手回しロクロに、珠の角切りがのこぎりから角切り台を使用することで、小さい珠が容易に作れるようになってきました。

珠算塾が生まれた（伊勢百日算）

江戸時代の末頃、三重県の北伊勢地方に珠算を専門に教える正芳流百日稽古塾ができました。この系統をひく井上親亮は、明治５年（1872）三重郡日野村（今の四日市市）に「百日稽古塾」（のちの共興学舎）を設立、その門下生は全国各地で活躍し、近代珠算の隆盛をもたらしました。